

際し、以上の點を胸に手をあて、よく考へる必要がある。

(九月廿五日)

和泉太夫の事

辻 部 政 太 郎

八月の下旬であつた。むし暑い午後、父の初盆だからといつて、和泉太夫がひよつこり訪ねて見えた。

私自身とはまだ馴染も浅いの、そんな風に義理固い人柄であつた。ポツリポツリと、四方山の雑談をして、二時間あまりも経つたらうか。夕立氣味の驟雨がきて、小やみになつた合間に、夕暮近く送り出した折の後姿が今も眼に浮ぶ。

後から思へば、何となくその日は元氣がなかつたやうな氣もする。

しかしそれから一ヶ月も経たぬ九月十七日の夜、前日急逝の報を受けとつて、全く思ひがけないことで愕いた。

九月はじめ南座へ出演したのが最後の床で、その前後、怪我したところから黴菌がはいつてひどく腫れ上り、西宮の懷仁病院へ入院中、黄疽の症状を呈し、食物を全然受けつけず急に死くなつたのだといふ。

私事に亘る思出を書いたが、文樂の太夫も、さらでだに人の少い折柄、こんな風に思ひがけぬ人まで死くなつて一入淋しい氣持がする。

古軼師は勿論別格として、織太夫を望みの第一とすれば、中堅の太夫中、和泉太夫は床の上でも好意のもてる人であつた。

地味ではあるが、正直な、まつとうな淨瑠璃であつたと思ふ。

正統派の師承關係のもとに、永くコツコツ鍛えて來た努力のせいであつたらう。

組見の多寡や皮相的な人氣などによつて少からず語り場が左右される今日、和泉太夫は概して不遇であつた。最近、ほんの少しばかり語り場がよくなつて來たやうに見受けられ、一度その語り口に合つた出し物で全力を傾けたヒットを聴きたいものと願つてゐたが、それも叶はぬことゝなつた。

若く見えたが、たしか六十四であつた筈だ。

それにつけても、文樂の興行當事者は、もう少し、ほんとうの意味で太夫(三味線人形についても同様であるが)を大切に、達識と公平さを以て、伸すべき人を伸すことに努力せねば、この貴重な演劇遺産の將來のために寒心すべきことだと思ふ。

和泉太夫を深く悼む情とともに、このことを今更痛感させられる。

(九、二八)